

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

遊城十代「融合次元……？」

【作者名】

YASUT

【あらすじ】

前々から書いてみたかった遊戯王物。デュエル描写つて以外と難し。

遊城十代「融合次元……？」

絶海の孤島。

周囲は海に囲まれており、島の中には生い茂った森林、暗く静かな洞窟、今にも噴火しそうな火山など、おおよそ『自然』に分類される全てがある。

全てというだけあってその敷地は広大だ。島というより、一つの国と言ってもいい。

一般人が観光に訪れたなら、ある者は浜辺ではしゃぎ回るだろう。他にもその広大な森林に癒されたり、無謀にも不気味な洞窟を探検したり、体力作りのために登山に向かったり。

用途は人それぞれだが、誰もがこの大自然を満喫することだろう。

だが彼らは違う。

彼らはそんなものに興味はないし、意味すら見出さない。

用途はただ一つ。

強い決闘者^{デュエリスト}を作る。

それがこの『デュエルアカデミア』が存在する意味であり、価値であり、創設者、赤羽霊王^{アカハネレイオウ}の第一の目的だ。

ここに存在する資材は全て、ただこれだけのために使われる。教育ではない。育成ではない。作るのだ。

ついて来れなければ切り捨てる。脱走者はカードに封じ見世物にする。

この人間は殆どがヒトではなくコマ。戦場でのみ力を振るう兵士^{ポーン}なのだ。

「はっ……はっ……はっ……」

その地獄のような孤島の中、少年は一人で走っていた。

背中には赤いナップザック。余程重いものナニかが入っているらしく、少年の動きに合わせてゴソゴソ動いている。

「はっ……はっ……っ、流石に走り疲れてきたな。どうだ、ユベル」

『大丈夫だよ。とりあえず今のところはね』

ユベル。そう呼ばれた何か少年の背後に現れる。

“何か”。それ以外にふさわしい言葉が見つからない。

そもそも性別すらはつきりしない。何しろ体が半分別物なのだ。

左は男で右は女。声の調子からして女性のように思えるが、真実は定かではない。

背中には黒く大きな翼があり、額には第三の目。身長も少年より頭一つほど大きいようだ。

「はあ……はあ……ふう」

『お疲れ十代。随分と走ったね』

「ああ……こんなに走ったのは……っ、久しぶりだぜ……けど、流石に撒いただろ」

十代は額の汗を拭い、走ってきた道を振り返る。

少年とて考えなしに逃げてきたのではない。彼自身このことはまだよく知らないが、『デュエルアカデミア』のことならばそこらの兵士より何倍も知っている。

「あっちこっち走り回って攪乱してやったからな。これでも撒けなきゃ、ちよっとお手上げだな。っ、そうだ」

十代は背負ったナップザックを下ろし、中を開ける。

すると、太った一匹の猫が鳴きながら飛び出した。

「そろそろ飯の時間だったよなーファラオ。ゴメンなー、ホントあいっらしつこくてさー」

『……君、今の状況分かってるかい？　ボクらは今、ここの決闘者達デュエリストに追われてる身なんだけど』

「そうだけとさ、まあいいじゃないか。よく言うだろ？　腹が減っては戦はできぬ、ってさ。」

……あ、やばい。俺も腹減ってきた」

『……はあ。全く君ってやつは、大物なのか馬鹿なのか』

『けど、それが十代君のいいところなのじゃー』

ひゅいん、とファラオの口から小さな球体が出てきた。

“球体”。それ以外にふさわしい言葉が見つからない。

だって球体だもの。光の玉だもの。ユーレイだもの。

『何事にも怯まないその姿勢。先生はディスクですにゃー』

「サンキュー大徳寺先生。そうだ、ファラオ見ててくれないか？　俺

ちよっと釣竿作るからさ」

『釣竿？　でも、釣りが出来そうな場所なんてないのにゃ』

「いや、もう少し行ったところにあるんだよなーこれが。ていうか、先生知らないのかよ。俺達が知ってるのとは色々違うけど、一応ここアカデミアだぜ？」

『流石に“じんなどころまで知ってるのは君だけだと思つのにゃ』

「そんなことないと思うけどなー……そうだ、じゃあこの際だし案内してやるぜ！　ほら行くぞファラオ。向ここの池で大物ガンガン釣ってやるからさー」

ファラオは“ニヤーン！”と元気よく鳴いたあと、再びナップザツクに潜り込んだ。自分で歩き気はないらしい。

それに苦笑しつつ、十代は手際よく猫用の餌を片付け、釣り場に向

かおつとした。

その、直前。

『十代』

一言だけ、ユベルは十代に呼びかけた。

「ああ

その一言を聞いて十代はナツプザックを下ろし、中に籠ったファラオを出す。

『十代君？』

「悪いなファラオ。飯はもう少しお預けた」

ファラオは爪で抗議する。

「いった、痛い！ ごめん、悪かった！」

十代はどう、どう、とファラオを制する。

一応は落ちついてくれたものの、またいつ飛び掛かってきてもおかしくないだろう。

「悪かったって。頼むから機嫌直してくれ。お詫びに、特等席で俺のデュエルを見せてやるからさ」

『デュエル？ でも十代君、相手は』

「いや、いるぜ。一人だけ、しかも小物みただけだな」

「言ったな。小僧」

十代の挑発に答え、一人の男が物陰から姿を現す。
軍人のような青い制服と、素顔を隠す仮面。

左手にはデッキとデュエルディスク。

「よう。さっきぶりだな、オベリスクフォースの戦士さん」

「なんのことだ。私が貴様と顔を合わせるのは初めてのはずだが」

「あれ？ ってことは、さっきのやつとは別人か。」

「うーん……やっぱり分かりにくいぜお前ら。せめて仮面はとらな
いか？」

「断る。貴様の指図を受けるつもりはない」

オベリスクフォース。そう呼ばれた男がデュエルディスクを展開する。

その様子を見て 十代は、少年のように目を輝かせた。

負ければカードにされる。それは十代とて分かっている。これは自分にとって負けられない戦いだ。

それでもなお、カードを見ると、ディスクを見ると、胸を躍らせずにはいられない。

つまるどころ遊城十代は、どうしようもないほどに、根っからの
決闘者デュエリストなのだ。

「へへっ。ああ、そうじゃなくっちゃな！」

十代もまたデュエルディスクを展開する。

ユベル、大徳寺、ファラオは彼の後ろに下がり観戦する。

前者二名は十代以外には見えていないのだが、念のためだ。

「貴様はここで捕らえさせてもらおう！」

「やれるものならやってみな！ いくぜ！」

「決闘《デュエル》!!」

決闘開始の宣言と同時に、場の空気が一変する。

両者共にLPは4000。これを削りきれば勝利となる。

「よし、俺のヒーローデッキの力を見せてやるぜ！ 俺のターン！」

意気揚々と先行をとったのは遊城十代。

その温度差に、男は違和感を感じざるを得ない。

デュエルとは文字通り決闘。魔術師であるプレイヤーがモンスターを召喚し、魔法・罫を巧みに使い敵を倒す。

敗北した者は、ただカードにされるのみだ。

「来い！ 《E・HERO バーストレディ》！」

《E・HERO バーストレディ》

星3 / 炎属性 / 戦士族 / 攻1200 / 守 800

「カードを一枚伏せて、俺はターンエンドだ」

「……なんだと？」

一ターン目が終わると同時に、男は眉をしかめて遊城十代を睨む。

フィールドに出たカードは僅か二枚。モンスターが一体と伏せ

カードが一枚だけだ。

それも召喚されたモンスターの攻撃力は1200、攻撃表示。

これ自体は大したことではない。手札にめぼしいカードがないせいでモンスターを召喚出来ない、なんてことは珍しくないからだ。

だが、相手がこの少年となれば話は違う。

遊城十代。

現在確認できているだけでも、この少年はオベリスクフォースの決闘者を五人撃退しているはずなのだ。

「貴様……私を舐めているのか」

「どうかな。遠慮しなくていいぜ。ただし、トラップに掛かっても知らないけどな」

「フン……私のターン！」

男はカードを引き、手札から一体のモンスターを選択する。

彼の戦術は変わらない。相手が誰であろうと、だ。

「私は《アンティーク・ギア・ハウンドトック古代の機械猟犬》を召喚！」

《アンティーク・ギア・ハウンドトック古代の機械猟犬》

星3 / 地属性 / 機械族 / 攻 1000 / 守 1000

機械仕掛けの猟犬が男のフィールドに出現した。

アンティーク・ギア古代の機械。その名を聞いて、遊城十代は懐かしげに目を細める。見たことのないモンスターではあるが、確かに面影はある。

「《アンティーク・ギア・ハウンドトック古代の機械猟犬》の効果発動！ 相手に600ポイントのダメージを与える！」

遊城十代

LP：4000 3400

「おっと……やるな、やつは」

「これで終わりだと思っな。私は更に魔法カード、《デュアルサモン二重召喚》を発動。このターン、私は二度通常召喚を行うことができる。

「アンティーク・ギア・ハウンドトック二体目の《古代の機械猟犬》を召喚！」

《アンティーク・ギア・ハウンドトック古代の機械猟犬》

星3 / 地属性 / 機械族 / 攻 1000 / 守 1000

「そして効果発動！ 再び600ポイントのダメージを与える！」

遊城十代

LP：3400 2800

「ここで《古代の機械獵犬》、第二の効果を発動。自分の場に他の《古代の機械》が存在するとき、手札とフィールドのモンスターで新たな《古代の機械》を融合召喚できる。

私はフィールドの二体のハウンドドッグと、手札の残り一体を融合

古の魂受け継がれし、機械仕掛けの獵犬達よ。 群れなして混じり

あい、新たなる力と共に生まれ変わらん！

融合召喚！ 現れる、レベル7！ 《古代の機械 参 頭

ハウンドドッグ
獵 犬》

《古代の機械 参 頭 獵 犬》

星7 / 地属性 / 機械族 / 攻 1800 / 守 1000

「これでいくら罠を仕掛けようと無駄だ。《古代の機械 参 頭 獵 犬》が攻撃するとき、相手は魔法・罠を発動できない。そして、このモンスターはターンに三回まで攻撃を行える。このターンで貴様は終わりだ」

「そいつはどうかな？」

「口の減らない子供だな。行け、トリプルバイトで攻撃！」

《古代の機械 参 頭 獵 犬》の攻撃が、バーストレディを粉碎する。

バーストレディの攻撃力は1200。その差の数値の600ポイントが遊城十代のライフから削られる。

遊城十代

「この瞬間、畏^{トラップ}発動！ 《ヒーローシグナル》！ 自分の場のモンスターが戦闘で破壊されたとき、デッキからレベル4以下の《E・HERO》を特殊召喚する！」

「何！」

トリプルバイトが二度目の攻撃に入る直前、遊城十代が伏せカード^{リバーズ}を発動した。

魔法・畏^{マジック・トラップ}が発動できないのは、あくまでトリプルバイトが攻撃するときのみ。二度目の攻撃に入る前、攻撃の節目ならば難なく発動できる。

「《E・HERO フェザーマン》を、守備表示で特殊召喚！」

《E・HERO フェザーマン》

星3 / 風属性 / 戦士族 / 攻1000 / 守1000

「ちっ 構うものか。行け、トリプルバイト！」

二度目の攻撃がフェザーマンを破壊する。

守備表示であるためライフは減らなかったが、これで遊城十代を守るモンスターは全滅した。

「これで三回目だ。《古代の機械参^{アンティーク・ギア}頭^{トリプルバイト} 獵^{ハウンド}犬^{ドッグ}》で、ダイレクトアタック！」

命令を受け、獵犬はそれぞれの口から炎の弾丸を打ち出した。

三つの弾丸は混ざり合い、業火となって遊城十代の全身を焼き尽くす。

「　　つくう、流石に今のは効いたぜ」

『大丈夫かい？　もうライフは風前の灯火だけだ』

「大丈夫だって、心配すんな。ヒーローは必ず勝つんだぜ」

「……何を話している」

「うあ、やっべ……」

男は怪訝な顔で遊城十代を睨む。

当人は相棒と相談しているだけなのだが、それ以外の者から見れば、彼は何もいない場所を相手にブツブツ話しているだけだ。

呟く、ではなく話す、であるあたり、余計にたちが悪い。

「あはは、悪い悪い。何でもない」

「……私はこれで、ターンエンドだ」

これにて二ターン目が終了した。

遊城十代の残りのライフはおよそ十分の一。もはや一度のミスも許されず、いつゼロになってもおかしくない。

「さて、ここから逆転だ！　俺のターン、ドロー……」

にもかかわらず、少年は笑っていた。

男は悟る。

なぜこの遊城十代という少年は、生死の淵にいてなお笑顔を絶やさないのか。

それは、自身の敗北をこれっぽっちも意識していないから。

どうやってこの逆境を乗り越えるか。この少年は常にそれを考えている。

極限のプラス思考。底抜けの能天気さ故のもの。兵士として過酷な環境を与えられたオベリスクフォースが絶対に持ち得ない天性の

武器だ。

「そっちが融合なら、こっちも融合で行かせてもらっせー！」

魔法カード、《ミラクル・フュージョン》を発動！ 墓地の素材モンスターをゲームから除外し、《E・HERO》を融合召喚する！ 俺は墓地からフェザーマンとバーストレディを除外し、融合！

現れる、マイフェアリットカード！ 《E・HERO フレイム・ウイングマン》！」

《E・HERO フレイム・ウイングマン》

星6 / 風属性 / 戦士族 / 攻2100 / 守1200

遊城十代のフィールドに、再び新たな英雄が誕生した。

フェザーマンとバーストレディの融合体。右手に火竜を宿し、翼で空を駆けるエレメンタルヒーロー。

「融合モンスターだと……！」

「まだまだ！ 俺は装備魔法《アサルト・アーマー》をフレイム・ウイングマンに装備！ 攻撃力を300ポイントアップ！」

《E・HERO フレイム・ウイングマン》

攻2100 攻2400

「そして、《アサルト・アーマー》を解除」

《E・HERO フレイム・ウイングマン》

攻2400 攻2100

「この効果により、フレイム・ウイングマンはこのターン、二回攻撃が出来る！」

「なんだよ……！」

「バトルだ！ フレイム・ウィングマンで、《古代の機械 参 頭アンティーク・ギア・トリプルバイト・ハウンドドッグ》を攻撃！ “フレイム・シュート”！」

正義の火炎が獵犬を喰らい尽くす。

フレイム・ウィングマンの攻撃力は2100。数値に従い、
《古代の機械 参 頭 獵 犬》は爆散した。

オベリスクフォース

LP：4000 3700

「そして、フレイム・ウィングマンの効果発動！ 戦闘で破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える！」

オベリスクフォース

LP：3700 1900

「ぐっ……馬鹿な」

「フレイム・ウィングマンにはまだ二回目の攻撃が残っている。行け！」

「馬鹿な……馬鹿な!!」

敗北を目前に、余裕の態度を崩さなかった男は動揺し始めた。

フレイム・ウィングマンは男の前に仁王立ちで立ち塞がり

「“フレイム・シュート”！」

「ぐあああああ!!」

召喚者の命に応え、最後の火炎いちげきをお見舞いした。

オベリスクフォース

LP：1900 0

「お見事。いやあ、すごいねキミ」

デュエル
決闘終了と同時に現れたのは一人の少年。

外見は遊城十代より少し若い。いや、幼いと言ったべきか。

だが遊城十代、そして彼と同化しているユベルは、その少年の異質さを即座に感じ取った。

デュエリスト
決闘者としての格が違うのだ。そこに倒れているオベリスクフォースの男とは決定的に。

「なんだ、見てたならもつと近くに来ればよかったのに」

「そうもいかなかったんだよ。ボクも暇じゃなかったからね。」

ボクの名前はユーリ。君は？」

「遊城十代。デュエルならいつでも受けてやるぜ。お前のようなヤツが相手でもな」

「そう？　じゃあ遊城十代さん。早速で悪いんだけど」

ユーリ。そう呼ばれた少年が指を鳴らす。

それが合図だったらしい。これまで観戦していたオベリスクフォース達が、標的を取り囲むように姿を見せた。

数は六。ユーリも含めると七か。

「ボク達全員と相手してもらえるかな？」

「……………はは、冗談」

オベリスクフォースの数を見て不利と判断したらしい。

それも当然か。一対七。どんな決闘者でも勝ち目はない。
デュエリスト

……………となれば、あとは逃亡あるのみ。

ファラオが隠れたナツプザックを背負い、逃げる準備を整える。

「へえ。この状況で逃げる気？」

「流石にこの数はちょっとな。お前とデュエルしてみたけど、今は遠慮しておくぜ」

「そう。でも、逃げきれれると思うっ？」

「悪いが 俺を、その辺の決闘者デュエリストと一緒にしてもらっちゃ困るぜ」

その変化に、誰もが怯んだ。

両目に変色する。

緑と橙。

およそ人間とは思えない、オッドアイへと。

「頼むぞ、ユベル…」

「仕方ないね、全く」

遊城十代はデッキからカードを引き、そのモンスターを召喚した。彼の背後霊たる《ユベル》が実体化する。翼を持つ三つ目の女。

ヒーローなどとは程遠い、まさに悪魔と呼ぶに相応しい化生を。

「このエネルギー……モンスターを実体化している？」

「そういうことだ。どうだ、ユベル」

ユベルは空に手をかざす。

一瞬黒い衝撃波が吹き抜けたあと、何もなかったはずの場所に「孔」が空いた。

一寸先は闇。絶対的な暗黒の世界だ。

「……うん、うっちはいつでもいいよ。これでボクらは逃げられる。最も、どこに跳ぶかまでは知らないけどね」

「サンキュー。よし、行くぜファラオ、大徳寺先生！」

光の玉はナツプザックの中に潜り込み、ファラオは鳴き声で返事をした。

「ん、じゃあ行くか！」

「っ　待て、貴様！」

孔の中に飛び込もうとした十代を、オベリスクフォースの一人が呼び止めた。

いつでも逃げられるというのは本当らしく、十代は余裕を持って立ち止まる。

「なんだよ、まだ何かあるのか？」

「貴様、その孔はなんだ！　どこに逃げるつもりだ！」

「決まってるだろ。跳ぶんだよ、次元の狭間をな！」

「な　次元、だと……？」

次元の狭間を跳ぶ。一般人が聞けば間違いなく首を傾げるだろう。

そしてこう結論づける。デタラメ、あるいはハッターだと。

だがその真意を知るユーリ、オベリスクフォースの決闘者達は、それを聞いて硬直した。

遊城十代が使っているデュエルディスクは、明らかに融合次元^{アカデミア}の物ではない。

にも関わらず。

アカデミアからのサポートを受けることなく、なぜ次元間を移動できるのか　と。

「じゃあ俺達は行くぜ！」

……ああ、そつだ。おい、そのあんた！」

「……」

指を差されたオベリスクフォース 先程倒された男が反応する。

「一つ言い忘れてたんだ。

ガツチャ。楽しいデュエルだったぜ、オベリスクフォース。それじゃ、今度こそまたな！」

楽しかった。

呆然とする彼らにそう言い残して、遊城十代は闇の中へ飛び込んでいった。